

「知らない」は差別のはじまり

中学校一年

ある日のことです。ぼくは、友だちとそのお母さん、ぼくの母との四人で、ファミリーレストランへ行きました。いつものように友だちと話したり、ドリンクバーを楽しんだりしていました。その時、ふと、少し離れた席に、六人組の大人たちが座っているのが見えました。その人たちは声も出さずに、ジエスチャーだけでやりとりをしていました。

「大人が一体、何をやってるんだろう。」そう思っ
て友だちに、「見てん。ヤバイやん。」と言って指を
さして、馬鹿じゃないの、というジエスチャーをし
ました。すると母たちも、何？という顔で、ぼくた
ちが見ている方向を見ました。その瞬間、母が「あ
んた、やっていいこととかんこととの区別もつか
んの？」と、烈火のごとくぼくを怒りました。友だ
ちのお母さんも、「それはいかんよ。」と言いました。
そこでぼくは、自分が何かとんでもないことをした
んだと思ったのですが、母が怒った本当の意味を、
そのときは理解できませんでした。

帰りの車の中で、母はずっとぼくのことを怒って
いました。そして、母の話から、ぼくが出会った人
たちはジエスチャーゲームをしていたのではなく、
手話で会話をしていたことを知りました。つまり、
ぼくは、耳の不自由な人たちのことを、意図的では
なかったけれど、馬鹿にしていたのです。

ニュースなどで、手話のことは知っていたけれど、
実際に手話で会話をしている場面をぼくは見たこと
がありませんでした。だから、あの場面でも、手話
をしているという考えに及びませんでした。耳の不
自由な人にとって手話は大切なコミュニケーション
ツールです。それを、ぼくは馬鹿にしたのです。「知
らなかった」「分からなかった」では済まされないの
です。

世の中にはたくさんの差別や偏見があります。そ
の原因の一つが、「知らない」ということだと思いま
す。「知らない」ということは、「差別のはじまり」
ということを、今回の出来事を通して気づきました。
そして、正しい知識を身につけることはもちろんの
こと、その「知識」と「日常」を結びつけて考える
ことが大切だということを学びました。そして、相
手の立場や気持ちになって考えること、つまり、「想

像力」も必要だと考えました。今振り返ると、ぼくが、レストランで見た大人たちのジェスチャーでのやりとりにも、もっと関心をよせたり、思いを馳せて「想像」したりすることができていれば気づけたかもしれないと思います。

ぼくは、今回の反省から、もう二度と同じような過ちを繰り返さないためにも、差別や偏見についてしっかり学んで正しい知識をもち、想像力を働かせながら、誰もが居心地がいいと感じる「共に生きる」社会をつくっていききたいです。